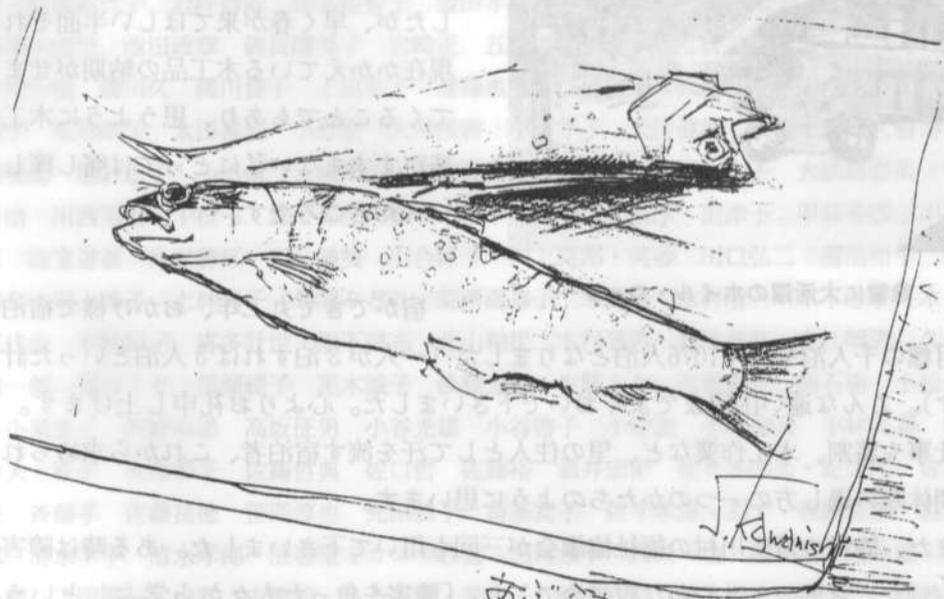


あぶらむ通信

第13号 1993年3月20日 あぶらむの会発行

〒509-41 岐阜県吉城郡国府町字津江 TEL 0577-72-4219



あぶらむの宿前!

'92 7

あぶらむの前で釣れた岩魚

漆工芸作家 川西重治氏作

飛驒だより

あぶらむ通信をお手の皆様には、寒中お見舞申し上げますといた
たいところですが、この通信が届く頃にはもうすっかり春といった
ころと思います。皆様にはお元気でお越しのことと思います。あぶ
らむの里で生活する者一同も元気に雪と闘っています。一月末まで
は春のような陽気でした。暮に大枚をはたいて除雪用のホイールローダーを購入し雪
に備えました。しかしまったくの出番なし、何だか損をしたような気持でしたが、二
月に入った昨日より大雪となり、ローダーの面目躍起といったところです。なにしろ
一晩に70~80cmほど降るのですから、除雪作業は冬の生活の重要な一部なのです。腰
までの雪をかきわけながら、玉子をうまないニワトリにエサをやりに行く桂さんが除



除雪に大活躍のホイール・ローダー

雪作業中の私に、「雪の苦勞もあと一カ
月、もうすぐ春ですよ」と慰めてくれま
したが、早く春が来てほしい半面それは
現在かかえている木工品の納期がせまっ
てくることでもあり、思うように木工作
業がすすまない私にとっては痛し痒しと
いったところです。

宿ができて丸二年、おかげ様で宿泊者
は目標の千人泊を越え1076人泊となりました（一人が3泊すれば3人泊といった計算
です）。こんな遠い山里までよくおいで下さいました。心よりお礼申し上げます。田
畑仕事や薪割、木作業など、里の住人として汗を流す宿泊者、これから求められる
長期休暇の過し方の一つのかたちのように思います。

また、隣村の丹生川村の福祉協議会が三回も用いて下さいました。ある時は障害者
をもったご家族のささやかな慰労会でした。「障害を負った人々から学ぶ」というこ
とで私が沖縄のハンセン病の人達の話をし、その後ささやかな料理での憩いの一時で
す。同様の会が、富山にある自閉症者の施設「めひ野の園」の母子会によってももた
れました。どの人も重荷を背負っての人生旅路です。あぶらむでの一時、ささやかな
リフレッシュメントになればありがたい限りです。このようなかたちであぶらむの宿
を用いて下さる人々にも感謝です。

しかし、何ととっても昨年ビックイベントは、沖縄愛楽園からの訪問団を迎えた
ことでした。前号の別刷りで佐藤一宏君がしっかりと書いてくれたので詳細は割愛さ
せていただきますが、彼らの訪問はこの地域の人々にも大きなインパクトを与えまし
た。特に、愛楽園の皆さんの老人ホーム「和光園」慰問は圧巻でした。慰問されるこ



ただいま木工作业所増築中
スミ付けだけはプロの大工さん（片町勝朗さん）

とがあっても、他人を慰問することなどありえなかった彼らでした。（社会的に許されなかったといった方が正しいでしょう）「一日一日、皆さんから見ればなんだァーと思われるようなささやかな目標をもってここまで生きてきました」と、両手両足を失った玉城さんが歌う「天さぐの花」をきいていたら、泣けて仕方がありませんでした。時代の変化をしっかりと感じました。愛楽園に関わって25年。もっとも嬉しい一コマでした。

10月中旬、今度は飛騨からと、総勢10名の「愛楽園訪問団」が出かけました。宇津江熊野神社神主の洞さん、真言宗飛騨千光寺住職大下大圓さん、参加者は超教派でした。私たち一同身にあまる歓迎をうけた数日間でした。歓迎会の席上、入園者の真栄田さん夫妻と大圓さんの「花」は、やんやの喝采をあげました。今年六月にはもう一度愛楽園の皆さんをお迎えし、この地の多くの人々に彼らの人生の歩をみていただこうと計画しています。

昨年も沢山の相談事が寄せられたあぶらむでした。その中で二人の若者が私たちと生活を共にしました。相談内容等はお伝えすることはできませんが、だんだん私の理解を越える内容となり、彼らを通して日本社会がかかえ込む病巣の一端を垣間見るように思えてなりません。

私の聖書の裏表紙に、父親からきた二十数年前の手紙がしっかりとはりつけてある。他界してもう十年近くになるが、たまにその手紙を読むと今も私の側にいて黙って励ましてくれているように思う。その中に、「あんたの手紙の通り、若い頃の明日はどんな人でも真暗であると思います。」という一節がある。忘れもしない大学浪人中の1月15日、模擬試験を終え重い足取りで駅に出た。新宿駅は晴れ着姿の若者で溢れていた。どの顔にも笑いが満ち、希望に夢ふくらんでいるようだった。その日は自分も成人式、本来ならば私の顔にも彼らと同様喜びが溢れているはずなのに、どのように人生を生きて行けばよいかわからず、大学合格などあり得ないような惨めな状態だった。そのあまりものコントラストに、私は泣きながら両親に手紙を書いたことを今もはっきりと憶えている。「磨けば磨くほど光ります。若い時は二度と無いから命をかけて励むこと、後はスムーズに進みます。親達も兄弟もあんたの大人を見守っている

から、何等心おきなく勉強さえすればよいと思います。」私は父のこの言葉に励まされ、支えられてあの暗かった青春時代を乗りきったように思うのです。

唐突にもこのような私事を持ち出した理由、私自身もよくわからないのですが、相談をうけながら思うことに、親と子の関係や刻んできた年輪が見えず、また、自分の人生でありながら他人ごとのよう

に感じられ、悩みを悩みとして悩み抜くことに背をむけているような若者の姿がうつるのです。このようなことを書くこと自体、一種のジェネレーション・ギャップかもしれません。しかし、時代がどのように移り変わろうとも、人間の成長は悩みを悩みとして悩み抜くところにうまれてくるのではないのでしょうか。その意味では、悩み抜くことは「旅する力」の大切な部分であるように思います。私も含めあぶらむに関わる者一同、しっかり悩みながら方向を求め、生きて行きたいと思えます。

さて、あぶらむの会発足して今年が7年目、ラッキーセブンの年です。ある程度活動の基盤も整ってきました。やってみようという人が三人集まれば、とってもおもしろい活動ができるように思います。今年「人」が与えられることを静かに祈ります。私事ですが、我家は三人の受験生をかかえながらも緊張感のない日々です。大学受験の長男をトトカルチョの対象にして楽しんでいる始末です。無論胴元は私です。多分、「サクラチル」でしょう。たった一つの試験で人生が左右される、彼らも現実に足を入れ始めたのです。自分の人生として、しっかり悩み、苦しんで生きていってほしく願っています。

大寒、寒さが厳しいほどその中に春が包み込まれているように思えてなりません。皆様のご健康をお祈りいたします。

1993年2月2日



愛楽園の皆さんとの島内観光

飛驒 — 沖繩 愛楽園 交流記

「飛驒だより」にもありましたように、昨年の6月、沖繩愛楽園の方々が飛驒の地を訪問され、そして10月には、飛驒の方々が沖繩の地を訪問され、お互いに深い感動を覚えられたようです。あぶらむの里を仲人とした、山国に生きる人々と海洋の国に生きる人々との素晴らしい交流の始まりです。そこで今回、飛驒の方が愛楽園の人々との出会いをどのように感じられたかご紹介させていただくことにしました。



天国からの小包

高山市在住 伊藤由里

愛楽園の皆様、私達にとってこの数日間は夢の様なひとときでした。まるで天国から小包が届いたような……。

現実にこんなひとときを持たななんて今でも信じられない気持です。

私は今まで何の不幸もなく、他人からは何て幸せな人なのといつも言われ続けて生きてきました。

でも心の中には、いつも死に対する恐怖を抱き続けており、その他諸々の困難に対してびくびくおびえ続けて、又、自我が強くと他人と接するとすぐ傷つくため、自分の殻に閉じこもる生活をずっと続けていました。

でも昨年来、どういうわけか仏教のお坊さんの導きにより、私がずっと求め続けていたキリスト教的な神に心をゆだねることができた様な気がしております。

それ以来、例え困難が来ようとも、神様がそれに耐える勇気をお与え下さる様な気がしていますし、実際今日まで神様はいろいろな形で、私を導いて下さっているのがよくわかります。

私の囲りに起こることなどたかがしれています。いくら神様に心をゆだねることができたと思っても、実際、大きな困難にであった時、本当に生きていく力を神様が与えて下さるのだろうか、不安が残っていました。でも神様は、私達のもとに天国が現実の世界に存在するという事を知らせに、愛楽園の方達をつれてきて下さいました。皆様は、私達のためにあの過酷な困難を耐え抜いて、生き続けてきて下さったのだという気がするのです。そして、今回、旅行に来ることができなかつた大勢の方達、又、まだ苦しみの途上にいらっしゃる方達の思いをいっぱいつめて、私達の前にはるばる来て下さった……。

このことに対する感謝の思いは、言葉では言い尽くせません。そして、そのために大郷先生が歩いていらっしゃる茨の道は、私の想像の域をはるかに越えているものと思われまふ。本当にありがとうございました。

そして私達は、大下大圓さんのおかげで皆様にお会いすることができたことを忘れるわけにはいきません。大圓さんは今、死に行く人達をどう支え見守って行くかという問題に力を尽くしていらっしゃいます。

先日、私は病院での一日看護婦体験をする機会を持つことができ、この世の地獄を垣間見たような気がしました。死の病に倒れるまで毎日、忙しい生活に追われ、死の準備をする余裕がなかつた方達が大勢いらっしゃいました。なかにはやすらかにその時を迎えていらっしゃる方もいますが、ほとんどの方は心の準備ができていないのではないのでしょうか。でも私にはどうしてさしあげることもできません。大圓さんは、このことに真正面から取り組んで下さっています。でも、歴史上で作られた仏教に対する偏見や、日本人の考え方等が厚い壁になっており、なかなか前に進めません。私の願いも同じところにあるのですが、何せ私では何の助けにもならないのです。

どうか皆様、大郷先生と同じく、大圓さんの茨の道をも見守り導いて下さいますようお願いいたします。

今回皆様にお会いできたもの一同、いつか沖縄へ行きたいという夢を今、持ち始めました。

その時果たして、私自身に行ける条件が整っているかどうかわかりませんが、夢が実現する様努力するつもりです。そして愛楽園の皆様、これからは全国で待っている



沖縄名物カチャーシーで喜びを全身で表現

私と同じ様な弱い心を持った人々へ勇気
を与えるために訪ねて行ってあげて下さ
います様、心からお願いいたします。

どうか、園の皆様にも感謝の気持をお
伝え下さいませ。私達も、今回条件が整
わず皆様と会うことができなかった大勢
の友達に、そちらの思いを必ず伝えます。

以上、あぶらむの里で交流なされた岐阜県飛騨高山市の伊藤由里さんからののお便り
をご紹介します。いただきました。

祈りの姿に深い感動

飛騨国府町在住 野村晃

昨年6月、沖縄愛楽園より17名の方々があぶらむの里にお見えになりました。
大郷さんより、前々から、沖縄のハンセン病者の方々のお話は聞いていました。身
内や部落の人々からの偏見や無理解で大変ご苦労されたこと、同病の青木恵哉先生が
ハンセン病の人々へキリストの福音の伝道と療養所設置の実現に死力を尽くし現在の
愛楽園が誕生したこと、園の皆様が命を尊びお互いに助け合いながら楽しく頑張って
暮らしてこられたこと、そして大郷先生が立教時代に学生を伴って訪問されていたこ
となどを聞いていました。

愛楽園の皆様があぶらむの里に滞在中は、毎晩皆様と交流を深め、本当に素晴らしい
沖縄の三線(さんしん)、太鼓、唄、踊りを心より鑑賞させていただきました。宴
の乾杯の発声を頼まれた際、私は、皆様がこれからも元気で長生きされるよう、そし
て今度は私達が飛騨から出向いて愛楽園で乾杯出来ることを祈念いたしました。

以来大郷さんのご努力のお陰で、10月14日より3泊4日の日程で、念願を果たせる
ことが出来ました。

那覇空港には、懐かしい20名近い人々が出向いに見えられ、手を取り合って再開を

喜びあいました。愛楽園では新築間もない立派な宿舎に泊めていただき、その夜はア
ワ盛りを頂戴しながら夜遅くまで歓談しました。

翌日は園内見学でした。青木先生の慰霊碑参拝後、病院、公会堂、公園、皆様の住
居を見学させていただきました。そして、重度の後遺症の方々のお祈りの会に参加さ
せていただき貴重な体験をすることが出来ました。愛楽園では戦中戦後の物資のない
時代、割合病気の症状の軽い人達はそれぞれに外部へ出て行き、苦勞をして食物や衣
類などを入手し、園の人達全員で分け合っていたそうです。その時身体が不自由で外
部へ出て行けなかった人達が集まり、自分達は何も出来ないから皆が少しでも沢山物
資を入手出来るよう、無事に帰ってくるよう皆のためにお祈りしようと言うことで始
まった祈りの会が、現在まで続いて行われているとのことでした。現在は、人々が幸
せに暮らせるよう、世界中に平和が訪れるよう祈っていらっしゃいます。両足義足の
老婦人、耳の聞こえない方、その他身体の不自由な方々の熱心な祈りの姿に深く感動
しました。私どもを代表して大下大圓和尚さんが、宗旨の違いを越えて、お祈りの会
の皆様誠心立派なお話をされ、目に涙して聞いていらっしゃいました。

その日の午後は、園のマイクロバスで沖縄の人達と観光地めぐりをしました。バス
の中では沖縄民謡を教えてもらいながら、植物園や名護パラダイスや海洋博記念公園
など、ツアーの旅行では行けないような良い所を親切に案内していただきました。夜
は、園内の公会堂で歓迎交流パーティーが盛大に行われ、第1部、第2部と長時
間にわたり楽しく過ごしました。

最終日は、大河ドラマ『琉球の風』のセット現場の見学をし、海岸ではロケ風景も
見る事が出来ました。その後南部戦跡に行き、摩文仁の丘やひめゆりの塔、記念館
を見学し、那覇空港に向かいました。

お別れの際、愛楽園の皆様もまた飛驒を訪ねたいとおっしゃり、来年また、あぶら
むの里で再会することをお約束しました。

それぞれにお土産も頂戴し、本当に皆様との心豊かな触れ合いに感謝しております。

一年をふりかえって

富田 桂

「畦で犬に説教してる」とご近所の方々は、大郷さんのことを笑うそうです。この話をきいて、育さんと大笑いしました。「実に言い得て妙だね」と。「犬だって、こちらが真剣ならわかるんだよ。たとえ言葉が通じなくても、我々は言葉を使うしかないじゃないか。」本当にそのとおりでと思いました。

あぶらむでの一年間、どれほど多くのものを私はいただけてきたのでしょうか。大郷ご夫妻、私を精神年齢では上回る子供たち、この宿で時間も場所も共有することのできた多くの人々、あたたかく受け入れて下さった飛驒の方々、そしてあぶらむの里の自然。台所でのさりげない一言にハッとさせられ、宿を訪れる様々な方の人生にふれることで、今まで目の向け方を知らなかった心の世界への扉が、ほんの少しではあるけれど開かれたよな気がします。「いろいろな、未知なる体験」に憧れ、『自分を成長させてくれそうな、いい体験』をし、『いい出会い』をしたくて仕方なかった私です。それがいつの間にか、人智を超えた出会いの不思議を感じるうちに、微妙に変わったようです。「いくら、たくさんの素敵の方々と出会いの機会を持ったとしても自分の中に、広くこまやかな心の世界を養う努力をしなければ、真の出会いはありません。今ある自分自身に足をつけるようにしていれば、出会いは支えられてゆくのではなかろうか」と思うようになりました。

「あぶらむ通信に原稿だよ。文は心です。」などと唐突に言われても、本当に困ってしまいます。「言うは易し」の愚を繰り返したくないと思う一方で、「いい文なんか書けない」と肩に力が入ってしまうのですから。ありのままにいたいと願っているくせに、そうはいかない私をまた見せつけられます。あぶらむでの一年間を思い起こそうとしてもごった煮状態で整理が付きませんが、一つ思い浮かぶことがあります。それは、肯定的にかかわろうとするが故に、No を言わなければならなかった時のことです。彼に対して、Yes と言うことは容易いことでした。そうした方が、こちら側も嫌な思いをせずすむし、何か彼にあったとき責任を問われるリスクを負わずすむのです。しかしその場面で Yes と言うことは、彼を深いところでバカにすることであり、そうすることで自分自身をも見えないところで屈辱し傷つけることでした。彼はこちら側の気持が変わらないのを知ると、それこそ挨拶もせず怒って出て行ってしまいました。私の知る中で、あの時ほど宿全体に、どうしようもない疲労感が漂い沈みこんだ日はなかったように思います。いまだに答えは出ていませんが、それでも時



桂さんも木工所増築作業にはりきっています。

随分後になってからポツリと洩らされたことです。私はただ疲労感に押しつぶされて、大郷ご夫妻の心中を思い図ることなどできようはずはありませんでした。こまごまと具体的な日常生活、現実生活の中での大郷さん、育さんのあり方、そしてあぶらむのあり様は、今現在の私はもちろん、将来の私を深く支えてゆくものになるであろうと思います。将来、この支えを支えとして本当に生かすことができるのかという自分に対する不安の方は、明日の私に譲りたいと思います。もう少し腰を落ち着けて働かせていただきたい、と心の底から思うようになったので、去年の十一月頃相談にのっていただきました。学び場は、決してあぶらむだけにあるわけではありませんが、それが今許されるのならば、一日一日大事に過ごしてゆきたいと思います。とりとめのない文で申し訳ありませんでした。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

事務局だより

日頃、「あぶらむの里建設募金」にご協力いただきありがとうございます。昨年6月に会員の募集を開始しましたところ、2月20日現在、正会員は282人（個人会員が278人、法人会員が4件）の方々からご応募がありました。また、賛助会員は103人の方々からご応募がありました。誠にありがとうございました。1993年度総会（あぶらむの会第1回総会）は、3月20日に東京の聖パウロ教会において開催することになりました。総会の結果については次号のあぶらむ通信でご報告いたします。1992年度会費未納の方は、出来るだけ早く納入下さいますようよろしくお願いいたします。会費振込の場合は、振込用紙に「正会員会費」または「賛助会員会費」とお書きください。会員の募集は引き続き行っておりますので、よろしくお願いいたします。会員申込

みハガキをお持ちでない方は、会費振込の際に振込用紙に「正会員申込み」または「賛助会員申込み」とお書きください。

なお、“あぶらむの里建設募金”は引き続き行っておりますので、よろしくお願いいたします。

会費および募金の振込口座は次の通りです。

郵便振替 名古屋0-88065 あぶらむの会

正会員申込み者（2月20日現在・敬称略）

新井信夫 安齊勇夫 浅川英明・尚子 安保洋勝 Adi Yoga 相沢牧人 朝比奈誼 秋野京子 有賀秀樹 新井省三 新井睦子 青木信之 阿部潮音 穴井悦子 新城甚栄 新城則 安藤正和 荒屋光夫 荻沢弘道 味岡敏江 雨宮大朔 伊藤和男 岩間光雄 今関公雄 井原洋子 岩佐香代子 岩坪哲哉 岩名佐智子 飯田孝太郎 石井正郎 石井光子 石神耕太郎 伊藤謙・由里 池田政章 磯貝澄美子 岩崎正 五十嵐孝子 糸数宝善 五十嵐正人 内田誠一 上埜一樹 鶴川久 鶴川貴子 上田弘子 遠藤恵子 江田宣子 大橋弘子 大八木規夫 岡田初子 尾形晴子 太田喜元 小野宏 大澤浅香 小原孝子 大房健樹 大脇一生 大脇博 大城松助 尾針恵子 小川卓 大畑邦夫 大家俊夫 小野央嗣 大塚よう子 大條真奈美 鴨下至治 川西重治・千枝子 風戸邦彦・修子・慎平・桃子 加納厚・美津子 甲藤善彦 甲藤光江 海宝道義 海宝静江 川又勝美 川合好子 川上詩郎・美砂 川口弘二 蒲池和子 籾木洋二 川上玲子 上林真子 菊間みどり 菊澤満喜子 木島出 木村清一 木下春子 木ノ内三代治 木村絹子 喜多計世 樹下健志 北山和民 木村晃男 倉持昌弘 倉辻明男 久保田淳一郎 黒井ミヤ 黒瀬禮子 黒木誠子 後藤元彰 牛腸とも 近藤真紀 興石勇 小松英樹 小泉恵子 河野裕道 高坂征男 小谷光雄 小谷啓子 小柳澄 小林勉夫 小林美喜 座間幹夫・彩子 佐藤節子 佐藤哲典 佐口哲 佐藤裕 酒井忠彬 佐々木国夫・紀久江 佐藤泰夫 齊藤孝 佐藤良徳 笹岡淳也 先田恭子 斎藤友子 佐々木淳・英子 佐藤信康 佐藤六郎 清水幸平 清水孝郎 渋谷聖ミカエル教会 志村弘子 周東一也 篠塚達 白神雄 波沢一郎 下田英一・由香 志賀治 島十三男・美紀子 鈴木康仁 鈴木博士・彰子 杉浦教二郎 鈴木孝雄 鈴木芳子 杉村進 鈴木千絵 杉山梅子 関正勝 千田好美 染谷孝章 外谷寿人 園部勝 谷昌二 高田建夫・智子 武市悦子 竹田眞 滝沢助蔵 谷腰明美 高浜匡 高瀬留美 武井秀雄・侑代 高柳真 田中誠 立花泉 高橋清子 竹中文男 田中雅子 高島光江・富美江 田島昌子 高橋章 田中一有 高橋敦子 田中幸治 高野アサノ 田口美乃里 高橋敏子 田坂昭範 谷市三 谷孝子 佃正昊 筒井啓子 塚本信三 辻本秀子 寺本義男 藤トピック 薦村の子 富田高保 富永紀子 富永興之介 鳥光健太郎 泊哲次 百々洋子 富安真理 名古屋学院大学キリスト教センター 中村正実 名取麻子 中西庄之助 中野良春 中野えり子 長山治之 中村尊子 成田麻子 中島弘一 永井千枝子 永井道子 西平則子 西平直 西村哲郎 西垣正子 新倉俊吾・久乃 西村正和 根岸秀行 根本通孝 林英夫 速水敏彦 半田節夫 W・F・ハナマン 原真也 畑野榮一 長谷川牧子 原亜紀子 平野淳子

平岡眞 比嘉良侑 平野幸夫 平野愛子 藤本隆 古市進 深田淳夫 深田馨子 藤倉待子
布施勇次郎 布施敬子 深井薫 福島玲子 福田詩郎 深野毅 堀内昭 星野一郎 堀江あつ
み 本間稔実 保坂正三 松浦修郎 町野紘 松丸一夫 松居勲 松本利勝 松山献 松山美
津子 宮田靖匡 宮崎秀貴 宮嶋眞 宮崎知子 三浦直子 道川佳代 宮本冬子(母と子を守
る会) 三原一男 室岡鉄夫・恵 宗像和雄 森田利光 森川清一 諸橋保夫 百井幸子 諸
江和子 本井雄次 矢後和彦・正子 八代崇 八代洋子 山下明 矢澤信夫 山崎豊 山田益
男 山崎美貴子 八尾恵子 吉岡邦英 吉岡久美 吉植よし子 吉田太 吉田立 (株)レオイ
若山房子 渡辺隆司 渡辺洋一 西田邦昭 西田賀端実

賛助会員申し込み者(2月20日現在・敬称略)

浅野登志恵 安藤希代絵 新垣タケ 阿波野弘子 岩波恒子 飯田麻子 糸数敦子 入川ヨシ
石井允 井田三郎 宇佐美慎吾 江州良秀 押田修実 小野健一 大友正幸 小笠原すわ 押
部真理子 大城恵子 大城ツル 大嶺佐智子 大杉匡弘 上村幸夫 神子沢新八郎 嘉手苺米
子 嘉数弘子 鎌木武弥 京嶋千香子 吉川仁 北野春子 木村敦子 木島浩 具志堅興永
高坂昌代 功野裕子 斎藤礼子 佐々木庸 佐々木淳・英子 塩田純子 島谷晴朗 塩川寛昇
鈴木佳子 鈴木希奈 鈴木啓 鈴木康邦 須具千世子 瀬川信子 瀬堀光江 先田泰子 田場
川陽子 高田祐介 田島昌子 田島義信 高橋秀夫 武井秀雄 塚田明人 戸田真夏 豊里マ
サ 戸塚恭子 中尾喜久美 長坂尚 中村聖子 長浜真次 中村綾 長嶋典子 中西庄之助
沼尾紀勝 橋本禮子 広瀬留雄 久田広子 東璋子 広谷和文 八月朔日浩 本田リン 堀切
糸子 松岡和夫 松尾素 松井明子 松島理恵 松村行雄 前田眞智子 又吉フミ 真栄田義
全 松本信代 三根則子 三村正次 三原達也 水谷泉 村山千栄子 村岡裕 森田トミ 保
田孝 山下佳子 山本照子 山里ツル 山城キク 山本百 吉田修 吉河佳代子 吉川仁 渡
辺幸 渡井久美 大城美智 玉城豊吉 リチャード・メリット

募金申し込み者(2月20日現在・敬称略)

福富誠吾 福富誠 フランクリン夫妻 矢後和彦・正子 浅川尚子 松岡和夫 大八木米子
古田秀樹 高野山真言宗和歌山青年教師会 祈りの家教会 五反田良蔵 横浜新伝道 日本奉
仕協会 政二スミ 千場千恵子 小池義人 黒木誠子 下形基樹 下畑幹 長坂尚 市川マリ
ア教会 筒井啓子 大平真成 古沢昭夫 永井千枝子 高槻マリア教会 横地光子 溝際庸介
松戸集会伝道所 宗像和雄 岩波恒子 鶴川久・貴子 新田和子 瀬川信子 瀬堀光江 小笠
原すわ 高瀬留美 具志堅興永 吉田修 橋本禮子 萩原庸宏 佐藤泰夫 戸塚恭子 渡辺幸
リチャード・メリット 平谷功 上村幸夫 松本信代 森田トミ 大沢浅香 安齊勇夫 京都
復活教会 石井正郎・光子 山田益男 木俣宣道 マッチャ子供の家 鬼本照男 テモテ教会
奉仕会 磯貝澄美子 八代学院宗教センター 木島出 石井秀夫 中村洋 安藤希代絵 倉石
昇 日下初子 寺本康郎 小沢福夫